

氏名（本籍）	船木 浩斗
学位の種類	博士（コーチング学）
学位記番号	博乙第 2997 号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	ハンドボール競技のセットディフェンスにおける 1対1防御に関する研究

主査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	會田 宏
副査	筑波大学教授	博士（工学）	浅井 武
副査	筑波大学助教	博士（コーチング学）	山田永子
副査	学習院大学准教授	博士（コーチング学）	北崎悦子

論文の内容の要旨

船木 浩斗 氏の博士学位論文は、ハンドボールにおける1対1防御に関する合理的なプレー方法について解明するとともに、その習得に有効なトレーニング方法について明らかにしたものである。その要旨は以下のとおりである。

【研究の目的】

ハンドボールの試合における失点場面では、1対1が破られてそのままシュートされるか、そこからパスが展開されてシュートにつなげられる場合が多い。そのため攻防が対峙する1対1の場面において、防御プレイヤーはマークしている相手攻撃プレイヤーに突破されない個人戦術力を身につけることがチームの競技力の向上にとって重要である。著者は、まずハンドボールにおける1対1の攻撃および防御に関する国内外の先行研究と、それを養成するトレーニング方法が紹介されている国内外の指導書を詳細に検討し、国内におけるハンドボールの指導者は1対1防御力の養成に関心があるにも関わらず、1対1防御に関するプレーモデルは十分に検討されていないことを明らかにしている。また、中学生、高校生、大学生などの育成年代のプレイヤーにおける1対1防御戦術力を向上させるためには、卓越したプレイヤーの1対1防御に関する実践知とそれを獲得した過程を質的に解釈することを通して、防御における個人戦術力の構造を解明し、指導の要点を明示する必要があることを明らかにしている。そこで本論文で著者は、まず国内外のトップレベルの試合の分析から突破阻止に有効な1対1防御プレーについて解明し1対1防御に関するプレーモデルを示すこと、次に卓越したプレイヤーが有する1対1防御に関する実践知について検討しハンドボールにおける1対1防御における戦術力の構造と指導の要点について明らかにすることを目的としている。

【論文の構成】

著者は本論文において、以下の研究課題を設定し、それぞれの課題を解決する調査を行っている。

(研究課題 1) ハンドボールのセットディフェンスにおける突破阻止に有効な 1 対 1 防御プレーの解明

研究課題 1 では、異なる 3 つのレベル(世界レベル、日本レベル、大学レベル)の公式戦で見られた 1 対 1 防御プレーを記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて分析し、得られた結果を横断的な視点で比較検討するとともに、いずれのレベルにおいても見られる共通の特徴、各レベルにおいて見られる特徴を明示することを試みた。その結果、突破阻止に有効な 1 対 1 防御プレーとして、オフザボール時においてゴールエリアラインからフリースローラインの間を動くプレー、マークする攻撃プレイヤーに注意を向けるプレー、前に詰めるプレー、オンザボール時において前に詰めるプレー、攻撃プレイヤーの活動を身体接触により積極的に制限するプレーが挙げられることを明らかにしている。また、これらのプレーは世界レベルにおいてより多く見られることを示している。

(研究課題 2-1) 卓越したプレイヤーが有する 1 対 1 防御に関する戦術力の構造の解明

研究課題 2-1 では、国際レベルで活躍した経験を持つ 5 名のハンドボールプレイヤーを対象に、主にセットディフェンスにおける 1 対 1 の突破阻止に関する動きのコツについて半構造化インタビュー調査を行い、その語りを質的に分析し、1 対 1 防御に関する戦術力の構造について明らかにすることを試みた。その結果、卓越した防御プレイヤーが実践している 1 対 1 防御プレーは、即興性を排除するプレー、相手の最終プレーに対する適切な対応、突発的な状況変化に対するリスクマネジメントから構成されている行為であることを解明している。またそれらは具体的なプレーとして、相手の走り込むスピードを抑えるけん制活動、ボール中心からマークする攻撃プレイヤー中心に変化させる位置どり、主にクイックシュートと利き腕側への突破を阻止できるポジショニングと接触プレーなどとして表出されることを明らかにしている。

(研究課題 2-2) 育成年代のプレイヤーに対する 1 対 1 防御の指導に関する要点の解明

研究課題 2-2 では、主に 1 対 1 の突破阻止に関する動きのコツの獲得過程、推奨される 1 対 1 防御の指導について、研究課題 2-1 と同じプレイヤーに同じ手続きで調査・分析を行い、1 対 1 防御の指導に関する要点について明らかにすることを試みた。その結果、オフザボール局面の指導では、まずマークする攻撃プレイヤー中心の防御プレーを、次にボール中心からマークする攻撃プレイヤー中心の位置取りに動きを変化させる防御プレーをプレイヤーに習得させること、オンザボール局面の指導では、相手の利き腕側に位置を取り続けることや相手との間合いを詰めることプレイヤーに志向させることなどが、指導の要点になることを示している。

【結論】

著者は、上記の研究課題を解決し、そこで得られた知見から、世界レベルのプレイヤーが試合において実践している 1 対 1 防御プレーは、国内トップレベルおよび国内育成年代のプレイヤーの目標像になること、プレイヤーには早い段階からオフザボールの動きの重要性について理解させ、1 対 1 突破阻止のトレーニングを実践させることが 1 対 1 防御における戦術力指導の要点になることを本論文の結論として示している。

審査の結果の要旨

(批評)

本博士論文は、これまで検討されることが少なかった防御における合理的なプレー方法と、個人の防御戦術力の構造を解明した点において、高いオリジナリティを有している。また、育成年代のプレイヤーの個人戦術力を養成するための要点を明示した点において、コーチング学研究領域の発展に貢献するものであると評価できる。今後は、今回明らかにした指導の要点を基に展開された個人戦術力を向上させるトレーニングの効果を検証することによって、研究の深まりが期待される。

令和3年1月21日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。